
七月の混沌

京根 弾生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七月の混沌

【Zマーク】

N1044V

【作者名】

京根 弥生

【あらすじ】

七月の、初夏が過ぎ去つ气温はじりじりと暑くなりはじめ、そんな日。

この悲しいほどに蒸し暑い盆地、京都に住む日丘まり子は今時工アコンもない学校の教室でうつらうつらと夢を見ていた。

ああ、頭がぐわぐわする、全身の水分が抜け干からびていくようだ。夢の中だろうか、夢ではないのだろうか、そんな曖昧な境界で聞こえてくる、水の波音のような声。

「匣入り娘のふりやせん輪廻、抜け出せんとや匣入り娘。振り返つてはならぬぞと、ひょうひょう鳥の声がする。」

ああ、暑さで参つてしまつたか。

そう思つた瞬間に、廊下で大きな音がした。

匣（前書き）

この小説を真似て匣にはいる、または人を入れるなどの行為はおやめください。非常に危険です。

\i28482\ruby\rb\3650\ruby

甲 v / r b v v r b v (v / r b v v r t ^ ~~v~~ j v / r t v v r
p v) v / r p v v / r u b y v とこののは、俗に四角く方形の箱
の「j」とをいづ。

決して人からはいるものではないし、ましてや異世界へ繋がるなど言語道断。まったくもってありえない話だ。

けれど、けれどもし、それが可能であればしたら。私は必ずあることを望むのだろう。

まったくもつてこの世間といふものか、不思議なことだらけである。

夕火の刻 あぶり 粘滑なるトーヴ ねばりが 遥場にありて回儀い錐穿つ はみまわりふるまきりうが
総てのらしきはボロゴーヴ、かくて郷遠しワースのうすめき叫ば さとじとお まわりふるまきりうが

「我が息子よ！ ジャバウオックに用心あれ！ 嘰らいつく顎、あさと引

「ジャブジャブ鳥にも心配るべし そして努^{ゆめ} 燻り狂えるバンダ一
スナッチの傍に寄るべからず！」

「ヴォーパルの剣を手に取りて 尾揃しき物探すこと永きに涉れり
憩う傍らにあるはタムタムの樹、物思いに耽りて足を休めぬ。

かくて暴なる思いに立ち止りしその折、両の眼を炯々（けいけい）
と燃やしたるジャバウォック、
そよそよとタルジイの森移ろい抜けて、
怒めきずりつつもそこに迫り来たらん！

一、二！ 一、二！ 貫きて尚も貫く
ヴォーパルの剣が刻み刈り獲らん！
ジャバウォックからは命を、勇士へは首を。
彼は意氣踏々（いきとうとう）たる凱旋のギャロップを踏む。

「さてもジャバウォックの討ち倒されしは真なりや？
我が腕に来たれ、赤射の男子よ！
おお芳晴らしき日よ！ 花柳かな！ 華麗かな！
父は喜びにクスクスと鼻を鳴らせり。

夕火の刻 粘滑なるトーヴ 遥場にありて回儀い錐穿つ。
総て弱ぼらしきはボロゴーヴ、かくて郷遠しラースのうずめき叫
ばん。

ジャバウォックの詩 ルイス・キャロル作
「鏡の国のアリス」

より引用

匣入り娘

外から蝉の声が聞こえる、みんなん、じーづじーづと鳴きだし、夏が来たのだと一生懸命に伝えていた。

一方の私は、この暑い中家にも帰らず、学校だつて午前授業だというのにエアコンもないこの教室で、昼も取らずに自分の机でうなだれています。・・・やはり暑い。机が汗でべとついて気持ち悪い。

だが、それでも帰る気にはなれない。

何故なら、まずこの机から立ち上がり、次に明日から夏休みにはいるため、置き勉していた教科書を持って帰るために詰めた重い鞄をもつ、それまた次に教室より暑い外にでて、自転車に鞄をのせて、鞄のせいで重たくなってしまった自転車をこいで、家まで帰る。

だめだ、絶対に面倒くさい。しかもこの京都市立蓮ノ葉高校から私の自宅まで、自転車で十五分もかかる。坂道も多いため、労力はいつもの倍になるわけだ。

そんなことを考えて、うつすらと開けていた目をもう一度閉じる。瞼を閉じて見えたのは熱い暗闇で、さつきほど寝つける気はしなかつた。さつきは夢を見るほど眠っていたといふ。ひ。

そう、先ほどまでは夢を見ていたのだ。血しづかの暑さで干からびていこうといふのに、夢では水の波音といふなんとも不思議な夢だ。

そしてその波音はしだいに小さな声といふ形にかたどり歩いていく、最後は明確にこひづるである。

「匣入り娘のゐりやせん輪廻^{めぐりね}、抜け出せんとや匣入り娘。振り返つてはならぬぞと、ひょうひょう鳥^{かばす}の声がする。」

何が匣入り娘なのだろうか、しかも、なぜか夢だとうのに浮かんできたのは箱ではなく匣なのだ。私には箱も匣も同じに思える、だって結局は物をいれるための物なのだから。あの有名な作家の小説にでてきた小説「匣の中の娘」じゃあるまいし。

蝉の声が絶えず聞こえる、誰もいない教室で一人机に頃垂れているのはじつに滑稽だな、としみじみ思った。

「何をしているんだい、日丘さん。」

唐突に、声が聞こえた。誰だろう、聞いたことのない声だ。ああ、それより体をはやく起こそなれば、見知らぬ誰かさんに失礼じやないか。

つすらぼんやりした頭で考えて、むくりと私は体を起こした。目の前には我が校の制服、ストライプのベージュのスカート、女子だ。顔をあげて相手の顔を見れば、にこりと微笑まれた。

随分と、すつとしている、と感じた。

別にキツネ顔というわけじゃないが、黒髪で真ん中分けのショートボブのような髪型と切れ長だがはつきりとあいた目、これぞ笑みだ、と言わんばかりに微笑んでいる口元。美人か、と聞かれれば、普通、だが、何か異質なものを感じる。

雰囲気だろうか、気配だろうか。彼女から滲み出る雰囲気は、高

校生というより、まるで老婆から少女までを足して、混ざりきらな
いままに押し出したような感じだ。例えば、マーブルなアイスや
パンより不完全で、湯銭でとけきらなかつた刻んだチョコレートよ
り完全な形だつた。

・・・例えの話だが、別にお腹がすいてるわけではない。食
い意地が張つてゐるわけでもない。

「つまりはお腹が減つてゐるんだね、飴、食べるかい? ベツコウ飴
だけれど。」

ぼーっと考えていたら、ひよいと飴を差し出された。短くきつた
割り箸に大阪万博の太陽の塔みたいな顔をした平たいベツコウ飴が
ついている。棒つきとは、珍しい。
と、いつより。

「人の心を読まないでいただきたい!」

私はここにこと笑う彼女にそう言つた。完璧に心を読まれた気が
して恥ずかしくなつた。

すると、彼女はここにこ顔をさらに笑わせて、くすくすと笑つた。
「読んでいないよ、そんな顔を君がしてゐるから、お腹が減つてい
るのかと思つて。」

食べないのかい?と先ほどのベツコウ飴を差し出してくる。何故
か口出しができなくなり、私は押し黙つてしまつた。無言でベツコ
ウ飴を受け取り、口に呑んだ。

「やつぱりお腹が減つていたんだね、おいしいだろ?」

「…………あんた、誰？」

聞いてくる彼女の質問を無視し、私は彼女の名前を聞いた。彼女は私のことを知っているようだが、あいにくクラスの生徒の名前すら覚える気のない私は、彼女の存在など気にしたこともなかつた。

私に問い合わせられて、彼女は、それはもう優しげに、少女のように、孫に微笑む老婆のように、彼女は微笑んで言つた。

「名無しの権兵衛。『じんべさん』って呼んでね。」

なんの[冗談だろ]う。あれだけにここと好意的にしておきながら、名前を教える気はないのか。

それでもにこにこと笑う彼女を前に、私は露骨に訝しげな顔をしてしまつた。

蝉の声が聞こえる。みんみんジーうーうー、けたたましく鳴いていた。

ひゅう、と教室に風が吹き抜ける。

がつしゃーんっ！

「…？」

廊下のほうで何か大きな物音がした。うすらぼんやりしていた頭
がはつきりと覚醒する。

あわてて机から立ち上がり、教室の後ろの扉を開けた。踏み出そ
うとした足元に転がるのはプリント類、
その奥には我が校の生徒であろう男子が盛大に転んでいた。

「ちよつ・・・！大丈夫ですか！？」

「つ？」

ふいに、耳元で誰かの声がした。こんなときこそやいでいる場
合か！と思い、後ろを振り返ったが、誰もいなかつた。ごんべさん
すらも、いなかつたのである。

蝉の声がする。

私は頭を一、二回ふって転んでいる男子に近づいた。

悪い先輩

「悪いね、手伝わせてしまつて。」

相変わらず蝉が鳴いている。それはやはりけたたましく、若干耳障りだつた。

そして結局、私は先ほど盛大にこけていた男子と、両手に大量のプリントを抱えながら廊下を歩いていた。

「かまいません。あれだけ盛大にこけているのに、スルーするつてのも悪いですし。」

そう言つて自分の持つているプリントをよいしょ、と抱えなおす。抱えているプリントは段ボールに入れられているのと合わせて、私の腰から肩まである。

これとその男子が持つている、やはり大量のプリントを一人で持つていたとは、重さといいバランスといい、よほど怪力なのだろう、この男は。私は男をまじまじと見つめた。男はそんな私の視線など気にしていなか、前を見据えている。

(しかしこの男、どこかで見憶えがある。)

誰もいない廊下で横に並んで歩く男の顔を見て、私はどこか違和感を覚えた。

そもそも、私が男の顔を覚えるなんてことが珍しいのだ。いくらこの男が眉目秀麗だからといって、そんな簡単に、関わり合いのない男の顔など、私は憶えない。憶えていないはずだ。第一に、こういうことを憶えるのは私ではなく、私の友達で一番面食いな渚の役目なのだ・・・・・ん?渚?

その時、私は自身の友達が何か、たしか一ヶ月ほど前、誰かを見て騒いでいたことを思い出す。

「ねえ！まろ子！見てよあれ！」

私の友達、園生渚が窓の外を指して何か騒いでいる。そのときは丁度昼休みで飯を食べ終わつたときで、自分の席の背もたれにもたれかかっていた私は氣怠い体を起こして渚の方を見た。渚は何か興奮している様子で、手招きしながら窓の外を指差していた。

「なんだ、また紺野先輩か……？なあ、前にも言ったが俺はあまりああいうチャライ男には興味は……」

俺、とは話しているとたまに出てしまう中学時代の私の一人称だ。今は私、でだいたい話しているが、渚と話しているとつい昔の癖がでてしまう。昔から、私が“男より男らしい女”といわれる由縁が、これもある。（まあ、半分は古風な考え方と話し方と性格から来ているんだろうけれど）立ち上がりつてのそと渚に近づくと、渚はふんぶんと首を振つて、ぴょんぴょんとはねて窓の外を見た。

「違うよー。紺野先輩なんかよりもっとアだよーほり、渡り廊下の方！」

（なんかつて、この前キヤーキヤーはじやいでたくせ）。ミーハーなやつめ。）

そう内心で悪態をついて私は窓の外をみた。五月中旬でさんさん

と差す日光が少しばかり暑かつた。

そう、その時だ。私がこの男を見たのは、窓の外、渡り廊下のところで、こいつは女子に告白されていたのだ。

男は後ろ姿で、その前に立つ女子の顔がよく見えたのを憶えている。女はいかにもチャラそうで、髪も巻いて、スカートを短くして、喋ればきんきん頭に響く甘えた声で、まだ若くハリのある肌に化粧を施した、いわゆる“姫系”的女だった。私はああいう女が苦手なのでよく憶えている、人間、自分の嫌なことはよく憶えているものだ。

その顔が、泣きそうに歪められていたのを思い出す。たぶん、自分が生きてきたなかで人生初めての告白だったのだろう。今までは告白されてきたか、成行きで付き合つてきたんだろうと思う。まあ、もちろんこれは私の、今までそういう奴を見てきたうえでの偏見だが。

そして、それは断られた。女はまるで、理解できない、「冗談でしょ?、みたいな顔をした。まあ、今までフラれた経験がなく、それだけ着飾つていればそつなるものなのだろう。私は告白されたこともなければ、しようと思つことえない。むしろ人間にあまり興味がないのだ、ぐだらない、とまでは思わないが、色恋沙汰には全く興味えない。

「告白か。ありやフラれたな。お氣の毒に。」

「まり子、ぜんつぜん気持ちがこもっていないよ、むしろ田^{ひと}があるの女^{ひと}を蔑んでるよ。」

当たり前だ、人の告白シーンを見て感想など出でこない。むしろよくそこまで着飾れたものだ、『こてこてと面の皮を厚くして、見目^{みてくわ}

だけをよくする女などに同情などしない。そんな奴に、私はよく思うことがある、見目を必要以上に飾る人間は、決まって中身がない。あつたとしても、見目麗しくなくとも輝いている人間にくらべれば、そんな中身は薄っぺらいものだ。

これはあくまでも私の持論だが、時折「あんなブスな子より私のほうが可愛い」なんていう女がいる、これは中身がなってない証拠だと私は思う。そうして人を卑下するから、輝きがなくなっていくんだ。僻んで、憎んで、そうするから君はその人に好かれなかつた、そう言いたくなる時がある。

相手が自分より中身がよかつた、そう思えば相手をみて自分を変えればいいだけなのに、と私は思うのだけれど。

そう、ほんやりと考えながら一人を見ていると、女の顔がより一層くしゃっと歪み、走り去つていった。ああ、あれは何か男に言われたな、と私は感じ取つた。

「あーあ、やっぱりフラれたね、あの女。^{ひと}可哀相に。」

渚が先を見越しているように言った。

「やっぱり、ってことは、毎回恒例なのか。あれ。」

私は渚に聞いた。

「うん。今まで千石先輩せんじやくに告白して成功した人、いないよ。むしろ返り討ちにあつてるので。」

「返り討ち？」

なんだそれは。さつきみたいに泣いて帰るつてことか。とかく

返り討ちの使い方間違つてないか、それ。

渚は私の問いに千石という男を見て、解説しだした。

「えつとね、まあ出す出すでしょ。するともう少し言われるんだって。」

「君、中身薄いね、つて。」

渚はあの男の真似、なのだろう。とりあえず真似をして、私を指差す。

「そしてその次に、びひじて僕を好きになるんだ。つて聞かれるの。」

「んで、その理由を答える。」

それを説明して、ここからがすごい。とにかく外で突っ立つている千石をさす。

「するとね、その答えの抜けているところ、つまりは論理的に説明できていないところをどんどん突き刺していくの。」

「しまいには昔出してきた子の普段の言動から見たばかり性格から、強烈にダメだししていくの。すごいでしょ？」

すい、といふか、えらく野暮つたい、といふか、これはおそらくだけれど、

「それで最後の最後に、『あいにくだが、君のような子には興味がない』って言われるんだって。」

「そのせいで、先輩は“**弾丸論破**”だの“某医大からでてきたロジカルモンスター”なんて言われるんだよ。」

あの男は、私と同じように、人間に興味がないかも知れない。あだ名のセンスがどうもパロディーなのが気になるが、私は渚にふうん、と相槌をうつた。

その時、外にいた千石がくるりとこちらに振り返った。
眉目秀麗、まさにそんな顔に浮かんでいたのは、どこか拗ねたような、退屈そうな顔だった。

「**千石 三條。**高校一年にして、**蓮高のオデュッセウス。**」

渚が目を輝かせて呟く。ちらりとそちらを見てやはり面食いなんだな、と軽い溜息を吐いた。

オデュッセウス、ギリシャ神話に出てくる一番の智将だ。トロイア戦争で数々の戦功を立てたことで有名である。

私はいつの間にかいなくなっていた千石のいた場所をぼんやりと見つめて再度溜息を吐いた。

本性

そうだ、こいつは千石三条だ。ロジカルモンスターだかオデュッセウスだか知らないがこの学校で最も有名な男ではないか。見憶えがある以前に、この学校で千石といえば三条と帰つてくるほどに有名な男ではないか……！

千石三条、この学校の首席にして文武両道、成績優秀、博識で蓮高のオデュッセウス。彼の前では教師でさえも赤子^{ややこ}同然。あつとう間に言葉でねじ伏せられてしまう。

外見で言えば誰もが認める眉田秀麗、イケメン、美男子であり、日本人ではありえない地毛で銀なのか金なのかクリームというのか、そう、小麦色といるべきか、そんな髪色をして、モデル並のルックス。スタイル抜群、本当に高校生なのか目を疑いたくなる容姿をしている。

性格はいわゆる好青年らしい。紳士的だ、と言われているが告白の件ではそんなところは見受けられなかつた。上辺だけ、という線が濃厚だらう。

(くそつ・・・!)

こんな時ばかりは自分の人間に対する関心のなさが恨めしい。こいつに関わると危険だ、と私の人間探知センサーが避難警告の警報を鳴らしている。なんとしてもこいつから早く逃れなければ……！

ちらりと横田で千石を見れば、奴は相変わらず前を見据えていた。

しばらく歩いて、ぴたりと足が止まる。教室の札を見れば図書室だつた

「うるさいだよ。」

そう言つて、千石は図書室の引き戸を引いて、中に入つていった。しばらくするとまた出てきて、私の持つてゐるプリントを受けとろうとした。

ぱちっ！

「痛つ……！」

「つ……！」

その時だつた、私と千石の手が触れるか触れないかの間で触れあつた瞬間、静電気のような、けれど田の前が白くなるような閃光が走つた。びりびりと体に電気がはしる、あまりの衝撃に足元がふらついた。千石もそれは同じようで渋い顔をしていたが、私の見間違いだろうか、一瞬、一瞬だけ。

千石はやりと口元をつりあげて、笑つた気がした。

（・・・？）

「大丈夫かい？」

目の前の千石と、先ほどの電気に妙な違和感を覚えていると、千石がこちらを心配そうに見つめていた。ああ、やはりさつきのは見間違いなのだと、千石の顔を見て思つた。

「大丈夫です。たかだか静電気ですし。」

この蒸し暑い夏に静電気なんて、おかしい話だが、それ以外に電気がおきる原因はここにはない。きっとプリントと制服が擦れあって静電気をおこさせたんだろう。それくらいしか、私の頭に浮かんだ消せない違和感には対処できなかつた。

そうして千石にプリントを渡す。千石はプリントを再び中へ持つていつた。

(よし！逃げるなら今だ……！)

チャンスを逃さぬようにして私は迅速にぐるりと体を反転させた、そして足を一步踏み出す。正確には踏み出そうとした。

「ちょっと待つてくれるかい、手伝ってくれたお礼がしたいんだ。

」

そんな声と共に肩を、遠慮なしにがつちりとつかまれる。決して、お礼がしたいといふ奴の力ではなかつた、むしろ“逃げれば命はない”と力で言われている気がした。

ああ、逃げるのはやめよ！。力を抜いて落胆するしかなかつた。

七月一十日 午後一時

何があつてこいつなつたのか、どうしてこいつなつてしまつたのか、私が聞きたいくらい残念な状況に、私は陥っていた。相変わらず猛暑で日はさんさんと差し、蝉はうるさく、じーうじーうと鳴いてい

た。

今現在、私の隣には自分の自転車を手で押している千石三条がいた。必然的に、私も自転車を押して歩いている。悲しいかな、私は千石にお礼とひとつした散歩に付き合わされていた。

「へえ、じゃあ田丘さんは僕を知っていたわけだ。」

千石は照れたように笑う。何故だろう、異常に憎たらしく見えてしまつのは、暑さにいら立つていいせいだろうか。

「ええ、まあ。不可抗力で。」

やんわりと返事をする。くそつ、帰り道からどんどん外れていく、というかここどこだよ。上鳥羽からも吉祥院からも外れていっているんじゃないだろうか。

私の通う蓮高は、全部で四つの区域から構成されている。そこから行きたい高校もなく、一般的の公立を受ける生徒が集まるため、結構なマンモス校で有名な学校だ。

その四つの中うち一つは上鳥羽、四つの中でもっとも何もなく、田舎でもなく都会でもない、テレビが来たら何を報道するか迷うくらい何もないところである。ちなみに私はここに住んでいる、何もないが、生徒の性格はいいほうだ。

二つ目は吉祥院。^{きつじょういん}ここはある程度都会であると私は思っている。だが大通りから外れてみればどこよりも入り組んでおり、見た目だけ、と思うこともある。ちなみに生徒の態度は一番ここが悪い、不良が多いことで四区の中でも有名だ。

三つ目は祥栄。^{しょうえい}ここは市街地で、見た目もよく今時の学校だ。あまり特徴はないが、ここまでくると西京極のあたりに入ってくる。

区域で言えばここが一番遠いのかもしれない。

四つ田は祥豊。しやうほうここはたしかもともと祥栄と同じ区だったが、小学校の関係で祥栄と祥豊とに別れてできた区だ。だから一番新しくやはり市街地で、特筆するところがないくらい普通である。

閑話休題。

いい加減意識を別のことにして飛ばすのはよそう。私は千石の言葉に再び耳を傾けた。

「ん？ それじゃまるで知りたくなかつたみたいに聞こえるよ？」

分かつてんじやねえかこのロジカル野郎！ むしろ今からでもできるならやむづらならしたいわ！

ちなみに一つ言つておこう、私は誰しもが認める毒舌で、罵詈雑言はお手の物なタイプである。つまり、口だけは回るタイプなのだ、決してツッコミとかそんな関西的なノリではない。

私は千石の言葉に乾いた笑いを返した。

そんな会話を繰り返していくうちにどんどんと町から離れていく。私が気づいたとき、すでにまわりは帰り道とは程遠く、木々があり遠くには高速道路が見え、ふと見れば山が近かつた。

「あの、ユーリーなんですか」「あ、ついたよ。」

本当にユーリーが自分の町なのか、不安になつて千石に聞いてみれば、言い終わらないうちに千石が“到着た”と言つた。けれど、まわりには何も、ない。

「え？」

はずだった。この先に行けば山があつて、その先へ抜けるトンネルは封鎖されているはず。

けれど田の前にはえらく古い、アーチ型の看板があつて、そこには“京極京商店街”と書かれていた。

京極京・・・?私は聞いたこともない地名に首をかしげた。京極、など西京極しか私は聞いたことがない。ましてやこの区域にこんなアーチの立つような商店街なんてなかつたはず・・・。

「この先にね、面白こといろいろがあるんだ。」

そう言つて千石は、商店街の中に躊躇なく足を進めた。何度も來たことがある口ぶりだった。

「ちよつ、先輩!置いてかないでくださいよー。」

私は、この場に一人にされるのが怖くて、相変わらず先に進む先輩のあとを追いかけた。先輩は、私の声に立ち止つてはくれたもの、振り向きはしなかつた。

けれど、私はこのとき、気づきもしなかつた。当たり前だ、私が見ていたのは彼の後姿。

前では、あの図書室のときのようすに笑つているなどと、思いもしなかつた。

奇妙な昭和男

もくもくと黙つて先輩の後ろを歩く。先輩は相変わらず前を向いたまま、黙つて商店街を歩き続けた。

私の体の中を表現できない不快感と嫌悪感がはしる。

どうしたんだろ？、この腹からまるで蛆がわいてでてくるような感覚は。神経が研ぎ澄まれ、恐ろしげほど無音なこの商店街の中で、自分と千石以外から発する音を聞き出そうとしている。じわり、と汗が噴き出る感覚がする、けれど汗の感覚はない。足が震えて、前に足がでない。自転車のハンドルを握る手が緩む。吐き気がして、私はその場にしゃがみこんだ。

がしゃつ、

「はあっ・・・・・あ、ぐう・・・・、うえつ・・・・」

目の前がゆがむ、涙か、頭か、脳震盪でも起こしたか。目前に広がるタイルに水滴が落ちるのがぼんやりと見えた。

だんだんと息が苦しくなる、咽喉がしめられていく感覚がある。くるしい。あたまがぶれていく、一瞬何か、ぶれたなかに何かが見えた。

なんだらつ、なにか酷く懐かしい。この商店街も、やつきの山道も、この感覚も。

何か、なにか思い出せやうなんだけれど、それが何か、わからない。

ぐりぐりと回る脳髄に髪をぐしゃぐしゃとかき回す。咽喉が苦し

くてたまらないはずなのに、奇声をあげようとして私は口を大きく開けた。

「落ち着け。」

耳に入ったのは、いやにトーンの低い千石の声だった。私は顔をあげて声のする方を向いた。数歩離れた先に、やはり後ろ姿の先輩が見えた。けれど、その雰囲気が、静けさをまとっている。

「落ち着いて、目を閉じろ。そしてゆっくり思いだせ。」

私は先輩の声に従い、ゆっくりと目を閉じた。そして、息を落ち着かせるように、閉じた咽喉で大きく息を吸った。

「西暦八百一年、七月二十日。お前はここで死んだ。」

息がぴたりととまる。

大量に吸い込んだ酸素をすべて使い果たすように、私の頭の中で走馬灯がはしつた。

袴で走る私、いや、私に似た女。追いかけてくる、あれは鬼？いや、般若の面だ。般若の面の人間。走っているのは、先ほどの山道だ、周りは田んぼだけれど、山の風景はそのまま残っている。だけれど、その先は行き止まり、獸道すらない。女は横道にそれて、叢の中をすすむ。葦の平原だったのか、下は沼。女は足をばたつかせるがなかなか進まない。般若是すいすいと進んでくる。

ああ、あんなにも速い、このままでは女は、私は、殺されてしま

う。

あと少し、後ろから般若が手を伸ばす。それは女の首にまとわりつき、力強くつかんだ。女がもがく、けれど般若が首をつかんだまま女を上へと持ち上げた。きりきりと首がしまる、女の爪が、般若の首を絞める手に突き刺さり、がりがりと引っ搔いた。

「匣之娘、捕ゑたり。」

般若が呟いた瞬間、女の手はだらりと力なく垂れた。

ぐちゃり、と女の体が泥の中へ落ちる。袴に泥がしみつき、女の顔は青白い。

般若の面から、黒い髪がたれる、ストレートの、真ん中に割れ髪。しゅるしゅると般若の角が縮み、怒りの形相が普通の人間の顔に戻つた。あれは、面じやなかつたのか。

しかし、見覚えのある顔だ。随分と、すつとしている。

「・・・・・つ！…！…はあつ・・・・！」

そこで走馬灯が途切れた。途端に空気が咽喉に通り、肺に満ちた。大きく息を吐いて、かつと口をこじ開けた。

「思い出したか？隨分と、怖い思いをしたらしいな。」

千石が、やはり後ろ姿のまま、ピクリとも動かず話す。私は訳が分からず、息を整えてゆっくりと立ち上がった。同じように自転車を立て直す。

「行こう、もうすぐだ。 おいで。」

先輩は、初めて私を誘い込み、私はそれに引き寄せられるよつこついて行つた。

ぴた、と先輩の足が止まる。次にくるりと右を向いた。

私もそれに従い、右を向いた。見た目からすると、駄菓子屋だろうか。古本屋にも見えるが、中にはきらきらした飴がたくさん入った蓋付きのガラス瓶や十円ガムがはいった箱、当たり札などが所狭しと並んでいる。今にも八十を超えた丸眼鏡をかけたお婆ちゃんが出てきそうだ。だが、戸はしまっており、前には「田植え休み」というお札が貼られている。その上には看板があつて「座天弁」とふわふわしたような、けれど硬い字で書かれていた。

「べん・・・てん・・ざ・・・・?」

変わった名だ。普通、座、なんていうのは何かを觀戦とか鑑賞するための場所につけるものだと思っていたけれど。

先ほどのこともあり呆然としていると、先輩ががたがたと戸を開け始めた。立てつけが悪いのか、無理に動かすと今にも戸が外れそうだった。私も慌てて自転車のスタンドを下した。

がたがたがた、がたんつ！

少々乱暴に先輩は引き戸を開けた。そしてずかずかと上り込む、休みなのに。

「おい！鶴！」
「ぬえ

「ひぬわつ・・・・！」

そして大声を上げた、人の家なのに。耳にびりびりと響く声で先

輩は誰かを呼ぶ。ぬえ、なんて珍しい名前だ。

「はいはい、そないに呼ばんとつても、聞こえとりますよ。」

そんな先輩の無礼な声に、まるでマイクで喋つてゐるような優しげな声が聞こえた。どうやら奥に見える急な階段から上つた一階にいるらしい。よく通る声だ。

「上がつところで」

続いて声がそう誘うと、先輩は後ろにいた私のほうを向く。私はその視線の意味が分からず、その眼を見返した。

「何してゐ、速く行け。」

「え。ええええ・・・・ーーー仮にもよそ様の家ですよせんぱーいから行け・・・・はい。」

さつきから思つていたが、先輩の口調がなんとなく荒い。そして最初から人の話を聞かない。

言葉を遮られたのはこれで二回目だ。

私は先輩の鋭利すぎる視線にすゝむと靴を脱いで上がる。ぎし、と古い床が軋んだ。

「お邪魔します。」

「はいよー、」

また上から声が聞こえる。耳がいいのだろうか、ボソッと呟いた

だけだつたのに。

「早く行け。」

分かつてゐるわーこのハツタリ野郎！何が紳士的だ！見せかけじゃないか！

後ろから聞こえた先輩の声に心の中で悪態をついて私は物と物の隙間に見える階段を上つた。急だ、立つて上るところそなうなので猫のように上つた。

上りきつて人が一人丁度立てるかぐらいの踊り場に立つ。だが、上りきつたはいいが、それから部屋に行く扉が見当たらない。左右と前は壁だった。

(どうやつて部屋に行くんだ・・・・?)

階段上つて壁なんて、直面したことのない場所に困惑していくと、前の壁の向こうから通つた声が再び聞こえた。

「あ、足元。足元見て。」

「え？」

足元、と言われて足元、の少し手前、前の壁の下らへんに、人が一人四つん這いになつてやつと入れるような、小さな戸があつた。まるで茶室のよつに。

「そこからはいるんだよ。」

「え、あ、はい。」

声に先導されてそこの引き戸を開ける。もぞもぞと入り込めば、室内は外が夏だというのに、まるで湿った森にいるような肌寒さだつた。そして薄暗く、明かりといえば部屋の奥にぼつり、とうとうくが焚かれているだけだった。

「よ、っこい、せー！」

やつと体を半分通したところで、室内を見回せば、大量の本が部屋をぐるっと囲むように、天井高さまでつまれていた。崩れ落ちてきたら、確実に逃れられない。

そして薄暗くて顔は見えないが、人が一人なにか、桐箱だろうか。縦長の桐箱を抱えた人がいた。そして、手元を見れば銀色に輝く髪。元をたどれば、どうやらその人から続いているようだ。

「さつさとはいれ！」

「どがつ！」

「いつてえつ！」

急に後ろから先輩の声が聞こえたと思えば、私の尻に激痛がはしる。

あいつ・・・・！女のケツ蹴りやがった・・・・なんの戸惑いもなく蹴りやがった・・・・！

私はその衝撃で部屋に転がりこみ、自分の尻を抑えてもだえる。じんじんと鈍い痛みがまだはしっていた。

「てめえつー何しやがるーさつきから先輩だからって甘くみてりや

調子のりやがつて・・・！」

「ふん、威勢がいいじつた。」

私は屈んで部屋に入つてくる先輩をにらみつけて怒声をあげる。先輩はそんな言葉に買い物言葉を鼻で笑つて返して、その場にどかっと座り込んだ。

「ひらひら、女の子を蹴るもんじゃないがし。変な性癖にも思えるよ？」

鶴と呼ばれた人だろうか、その人が仲裁にはいる。優しくよく通る声は、私の怒りを鎮めてこの尻の痛みは鎮めてはくれなかつた。

「人に変な性癖をつけるな、鶴。せつかく匣娘を見つけてきてやつたのに。」

先輩はしつとした顔で、相変わらず前を見据えて言つた。はじめ、が何かはわからなかつたが、私のことを指している、ということは分かつた。

「おやおや、それは『苦労さん』でした。びつせあんさんのことやし、無理やり連れてきたんやううとおもうけど。」

鶴はそう言つて私のほうを見る。私は目が慣ってきたのか、ようやく鶴の顔を確認できた。そして先輩が実は結構乱暴でしたたかな性格だということも分かつた。分かりたくはなかつたけれど。

「こりつしゃい、ゆづこみ弁天座へ。店主の鶴です。」

鶴は首を傾けて、さらりと銀の長く無造作に伸ばした髪を揺らして、実に人懐っこい笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1044v/>

七月の混沌

2011年8月2日03時29分発行